

# 地中海

*MARE MEDITERRANEUM*

2019.12



令和元年12月1日発行(毎月1回1日発行)第67巻第12号 No.739

## 創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下してきた北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

# 地中海

二〇一九年十二月号 (通卷七三九号)

◇今月の二十首詠……妻の被爆日 吉永惟昭 2

■作品 [A] 中島央子・中島義雄他 4

A 永井光子他 20

B 丹羽哲也他 56

C 永井秀次郎他 70

A 宇井秀雄他 84

■オリブ集 本田昌子・松瀬トヨ子他 45

◇今月の二人 くずはらりつ・山崎三千代 16

香川進の生きものの歌 田土成彦 14

香川進師つれづれ 5 (午前三時) 佐久間晟 15

《特集》高尾恭子 あっラカルト 37

短歌 夏のかげろう

エッセイ 「一冊の本」のはなし

エッセイ 沖繩 ―はじまりはテンペストから

◇アンソロジー 〈氷〉 高津砂千子 52

私と短歌との出会い (208) 西田江美子 19

◇シルクロード・カフェ ―〔責任編集〕 木村文子 54

■歌壇月旦 裾野を広げる 藤田美智子 75

■遊覧寄港 〈私の育った吉備国〉 岩月宏彦 51

第一歌集の頃 松浦禎子・磯田ひさ子 104

■十月号作品批評 牧 雄彦・岩井久美子 76

A……………牧 雄彦・岩井久美子

B……………八田曉美・根岸 亮

C……………田口紀久子

オリブ集……………関根和美

今月の二人・作品評 久我田鶴子 18

送風塔 瀨田みや子 69

福島発・風のたより 石井悠子 68

最近の歌誌より 〔編集部〕 牧 雄彦 105

支社・グループ掲示板 (大阪支社) 106

クリップ……………107 神田通信……………108

〈写真・歌合わせ〉作品募集……………表3

(表紙デザイン) Tazuko Kuga

## 妻の被爆日

吉永 惟昭

元号なき暦八月九日は先負とのみ記す妻の被爆日

さだめ変えし 灼熱<sup>ハル</sup> 妻の浴びたるは七十四年前の長崎

爆心の二キロ近くの崖下にたたきつけられし妻十三歳

去来する刻の流れの走馬灯回りいるまま妻の被爆日

原子野を這いずり逃げし母と娘 風冷たくもふるさどがあった

白血球足りぬ乙女の憧れは「青い山脈」恋はみのりて

被爆あと七年を経て産みし児の血ふきて逝きぬ生活虚弱児

被爆二世三人育<sup>みたり</sup>てし恐怖感まだ胸うちに黒き雨降る

昭和6年生まれ。  
昭和57年、地中海熊本支社に所属。  
「夕暮の道」「夕暮と竹行」などの著述あり。

母逝きし年の被爆日追悼に参列できたふた昔前

入退院たび重なれど被爆日に入院中は初めての妻

被爆刻は妻と過ごさん発つ家の柿の葉ずれのざわめきはなに

蝉時雨はたと途絶えぬ「黙禱」十一時二分 長崎の鐘

献水の儀伝うれど 〃水・水・水〃 被爆地の惨風化避けえず

ヒバクシャの平均妻より五歳下いよよ語り部消ゆる日近し

悲鳴あぐ患者も在るに誰も来ぬ病室に寡黙被爆日の妻

皆看てるポータブルへの自立自座これができれば退院の許可

「帰りたい」ベッドの柵に縋る妻甲に浮き出る静脈太し

カステラも拒む妻です体重を減らして立てたら家に戻れる

ねえあなた生まれ変わるものならば人来ぬ森の獺になりたい

三界に家なきが待つは子らからのゆりかご電話妻の被爆日

# 作品 A

中島 央子

あしあと

・森

子ら孫ら曾孫まはりて戻りくる正月の夜をさすらふジョーカー  
 「恋ヶ窪」駅に降りたつ春彼岸あはれ遊女の伝説を聴く  
 劇場を出でたる空の明るさよ白夜の国の午後十時すぎ  
 旅とはく来たるまなこに黒塗りのゴンドラが待つサントラルチア駅  
 宰相の追悼のことは響かざり八月六日の煙雨に吹かる  
 白球を追ひたる球児のあしあとを今宵ならずや望の月光か  
 九十年生き来ていまだコンパスの支店のやうになれぬ軸足

中島 義雄

いのち

・岡

白桃を丸嚙りせし口拭ふ夏を越ゆるにまだ一ヶ月  
 九十二歳にしてはと珍獣の如く言ひ医師の診察は五分で終はる  
 爺と摘みし土筆染しと来るメールぬかるみの坂を雨が洗ひぬ  
 背を立てて歩むと吾を人言へど胸張りて生くる歩幅にあらす  
 敵意かたがは露な歌評も来よと氣負ひたる代を疾く過ぎて人間無慥  
 感動に疎くなりたるわが耳が夜の鏡に大きく映る  
 どうでもよき九十二歳の顔洗ひ去年娘の呉れしクリームを塗る

椎名 恒治

夢紀行

・橋

遠空にひびく夢紀行ふるさとへ九十九里浜の潮騒  
 上総一宮より頼朝が一里ごと矢を立てたりといふ伝説  
 わが生まれたる「矢指が浦」はこの浜の中間に因れりといへり  
 北総台地先端一帯立ち入り禁止高射砲陣地なりき  
 彩りし吹流し常に空浮きて砲轟きたりし少年時代  
 わたのはらわたのはらはるか——矢指小学校校歌も忘れ果てたり  
 遠足は飯岡波止場まで裸足足袋にて三川の川尻越えき

永塚 節子

記憶

・銀

枯葉色の大地縁に変わるとも野いちご摘みし夏は還らず  
 秋風に音なくゆるるねこじゃらし君送る日の記憶とならん  
 電線に並ぶむくどりおおかたは夕日の沈む方へ向きおり  
 一日の疲れやわらぐ家までの道のかなたに十三夜の月  
 大振りの器にゆらく作り立ての葛きりの味今日の記憶に  
 都会より帰る電車の窓の外に海見え始め ああ息を吐く  
 嬉しきこと一つあります頂きしえにしだざわわ黄の波を打つ

萩 葉子

菜の花

・銀

となりの空き地にアバウトが建ち庭の風がまごついている  
 ゆっくりと花豆煮る日を作れずにととうとう師走風肌寒い  
 古川は今では遠い森のなか陽ざしも人も昔のままに  
 菜の花が一面に咲くカレンダー三月嬉しいことがありそう  
 雨の日の小さな木の橋わたるとき息整える歩みゆるめて  
 初夏にきくピアノニシモ遠い日の合唱コンクール クラスの顔顔  
 氣まぐれに蒔いた紫蘇の種 忘れた頃に緑の絨毯

## 白子れい

凡々の日々

・洛

街燈に生るる自の影と語りあい励ましあいて朝の散歩路  
 明け早くなりて鶯ケキョケキョと迎えるるに歩みのはずむ  
 新しきさみどりの芽の出ずる道われにも芽吹け新たなる理想  
 訪ねゆく父ははの亡く訪いくる子なき日々彩る庭の花はな  
 師の逝かれ御仏前にて掌をあわす習い何時しか十七回忌  
 ききたきこと話したきこと数多あるも師はもの言わず唯笑みます  
 ふる里の丘にて描きし青春の理想果たすなく凡々の日々

## ばばりょうこ

意にあらす

・鹿

おとがいを両の手のひらにはさみ入れあまりある愁いをささえておりぬ  
 てのひらの横一線の手相上にかたつむり追わせ占ってみよう  
 濃淡に雲が幾重にもなびきいて病舎の窓のカーテンとなる  
 病み呆け：殊に下の句は意にあらす口紅ひきて口角を上げたり  
 ゆくりなく見せられし母の女学生時代 羽織袴と編上の靴  
 うつし絵はセピア色なれど青春を蘇りませり母よああ母  
 幼子となりゆくひととうたうた 「かえるのうたがきこえてくるよ」

## 浜谷久子

波の音

・地

おはようと声掛け合って明ける家ひと言ふた言遺影も交じり  
 ペンギンは名前を呼ばれ餌をもらう本当の名は何なのだろう  
 おさまらぬ咳に効かない処方薬喉に振りまく龍角散を  
 青虫の消える霜の日キャベツの葉ふっくら巻いてふっくら太る  
 振り向けば夕闇 そろそろ故郷に帰れと波の音が聞こえる  
 浅蜷貝絶えてひさしく復活の兆しのあると風のたよりは  
 思ひ出は時のまにまを砂と化し貝殻のなかに小さく納まる

## 浜本芙美

桃色の花

・夢

時くれば約束のごと立ち上がりなよなよと咲く花ほととぎす  
 友の庭の日ざしふふみて咲きたりし壺の紅ばらにそつと頬よす  
 雨の日は宿痾抱えるわが内の湖も鉛の色に昏みぬ  
 朝ごとに買物に行つてくれる夫にお決まり言葉かけて見送る  
 もらいたる鉢植え少々とうみしが今朝愛らしき桃色の花  
 くれがたの頭上の雲よX線胸部撮影の肋骨のさま  
 口遊みナイフ操る朝の卓「雪よりリンゴの香のごとく降り」

## 檜垣美保子

背

・昴

ふるさととは母居るところ「広島に帰る」という子「行く」と言う孫  
 雲のなき空はどこかたよりなく夕べにとどくメール孫より  
 しらかべに影絵のきつねの横顔のふたつ向き合いおさなごの声  
 立ちてなす放尿はまだ三回目二歳男子のほこらしき背  
 男の孫のどこまでつづく呪文かな「ちんちんぶらぶら」笑い転げて  
 ほおずきの朱のはじけたることとき空背を染めてくれ 東へあるく  
 胡蝶蘭さきっぱの花ひとつ落ち事はなりゆきしだいの六月

## 藤田美智子

ふるさと

・新

灰色の空ゆく二羽の白鳥が雪を呼ぶらし白きひとひら  
 あきらめをさらりと語りふるを聞く横顔のみが見える席より  
 就学前に避難せし子らのふるさとと綿雲のうへにぼかんと浮かぶ  
 怒りてもいいはずなのに笑みてゐる歳月は怒りのかたちを交へる  
 刺さりたる言葉がひとつ葉は棘に姿を変へてゆくこともある  
 水底の石のぬめりなど思ひをり人のこころの読みがたき夜を  
 夕闇に川面は銀いろ光りつつ空に流れのかたちを示す

藤森巳行 『徒長枝』を読む会

松浦禎子 ヴァチカン

蓮の花迎へてくれし蓮笑庵『徒長枝』を読む会へ小道を登る  
山裾を雨が浄めて通り過ぐ『徒長枝』を読む会午後の休憩  
三反歩あれば食へるとデコ屋敷主の言葉囁み締めてゐる  
田舎では馬鹿にされたり三反歩耕す百姓三反百姓  
大自然の恵みを享受し生きてゆく冬はデコを作つて暮す  
大空へ心を放て舞ひ踊れおかめひよつとこお面を被り  
デコ屋敷主と一緒に踊りたりお面を付けて心を解放

船田清子 みどりの龍

松永智子 空

極北の空にみどりの龍うねり月を巻きつつさらに高みへ  
汝が詠みし平城旧址の風揚げのイベントとなる新春の空  
凧も人も天地に溢れ新春の言祝をなす「ミテマスカ? イマ」  
谷川岳新緑の裾野に群れ咲けるしらねあふひの紫の風  
汝が歌集表紙飾りし清戸迫壁画のヒビ割れ激しとニュース  
街角にきりりと咲きぬし四照花の今春一花もつひに照らさず  
値も柄もみな気に入らぬ 花柄のTシャツ取り出し華やきてみむ

牧 雄彦 亡き人のこゑ

三浦好博 蜘蛛

兄も姉も病院に臥す秋となり台風のあと空青く澄む  
病院の庭の片隅日を受けていろはもみちの紅かがやけり  
「また来るよ」と言へばかすかに手をあげて姉は唇動かしにけり  
東山やや色づきてしづかなり姉を見舞ひて道に秋踏む  
姉の作りし「樺だら」は京の冬の味いまは過ぎし日の思ひ出の味  
姉逝きてふた月兄も後を追ふ白く明けゆくきさらぎの朝  
残照の冬空映す川の面をかすかに伝ひ来亡き人のこゑ

私よりDNAが五億多い蜘蛛を殺さぬ理由のひとつ  
我が影に入りて出でゆく蟻一匹我を残して影連れ去りぬ  
畑土をビニール覆へば水と見る交尾の蜻蛉が卵産み行く  
台風は無理矢理裂かれしスタ椎の太枝が森の香りを放つ  
秋灯の下に読みあはる「夢十夜」浮遊する人の影を追ひつつ  
ブルーシートの屋根より雨の漏るる日は家内に傘をさせしと友は  
そのままにのされし百足四寸の乾ける上を自転車に轢く



宮本靖彦 初秋

・凌

ザンパランと台風の雨降りだしぬ今年今月もう三回目  
六甲の入り日の朱く余波風に流れを乱す鬪雲かな  
賞品のティッシュの箱のむらさきにグランドゴルフの秋は来にけり  
流れ来し金木犀の香グランドに季節おくれの秋の便りと  
集団疎開七十五周年記念日を心に覚えりハビリに行く  
行員の女性減りたるわが銀行行方知らねどこも戦場  
歳並の脳の萎縮を告げらるる変へずに行かう我が人生を

三好 聖三

猫背

・伊

ゆく夏や薔薇戦争のあたりにて書を閉じ伸びし蔓草を刈る  
「驟雨」洗濯男は足早に毛布・シーツを取り込みにくく  
野の道をつつきつつゆく雉鳩や今日ひさかたの青空となる  
閑いに敗れたものは去るといふことわりらしき猫の世界も  
撤退は死への道行きかも知れずしつぽ曲がり黒猫のこと  
猫にしか興味がないというような暮らしぶりだぜ猫背の爺は  
明日からはトトロを再びやるらしい寂しい町の模倣映画館

御代田澄江

西窓

・茨

そより吹く風稔やけし令和元年 祝膳ととのへ気持改む  
十数年生らず秋には伐採と思ひぬし枇杷たわわに実る  
小春日を花の雅に憩はせて紅深き山茶花の花  
不老不死の薬を盗み月に逃げし伝説の「嫦娥」の名持つ中国月探査機  
持方の薙弱づくりの老夫婦平安千年の火室を守る  
春風にもみしだかるる白蓮の咲き残る見ゆ強く生くべし  
金色に照る西の窓いつまでも開き置きたし閉めねばならぬ

茂木 斌

敬老祝金

・埼

階下にて笑ひ転げる妻の声「エンタの神様」見てのやうらし  
校正より帰りし夕べありがたし敬老祝金届きてをりぬ  
足のろとなりしも歩く楽しさの三露の山にもう十五年  
草薮を刈れば飛びだす蟋蟀のスピーカージャンプ右に左に  
川幅の日本一はわが住まふ鴻巣にあり二五三七メートル  
川幅の長さ二五三七米の奇しくもわが家の電話番号  
誰かいふ二二二八つと登った至仏ほぐがいふ高さ二三五六燧ヶ岳は

もとむらしげと

父の栗畑

・そ

柿の木の園でありしが父の植えし栗の木今や柿より実る  
栗の実の実りたる頃母よりの電話のありぬ栗の落ちしと  
畑へとたどる細道に草の伸び足もと隠し朝露ぬらす  
朴訥の父の心に栗ひろう姿の浮かびしか子と来て拾う  
子らと来し栗の畑に亡き父を偲びつつ穂を足に踏みゆく  
栗の木の零しし穂をわが足にひらけば艶ある実の二つあり  
入口に一本残りし柿の木の葉も落ちゆきて数個の熟柿

八乙女由朗

どじ賛歌

・柴

芽吹き初む木木に來たりている野鳥風に吹かれて時によろける  
いくたびか地震に倒れし傷痕を見せてさやけし石灯笼は  
山墓の麓あるくは老に入る好みか見えてほほえましか  
老いすすめば昔の言葉いでて来ておのれも嬉し妻も喜ぶ  
本年は蜂に刺さるるは三回目どじとなりたる証拠なるべし  
過ぎてはや母の三十三回忌吊灯笼にいる紙を張る  
バナナ食うを勧めし医師が通いたる近道なりきこの田圃道

## 山下雅子

ミニひまわり

・習

いなごまろはこへらあかざも食なりし少女は平均年齢超えぬ  
ミニひまわりされどひまわり「夕暮」の知らぬ令和の日の光浴ぶ  
穏しかる元旦の空澄みわたり大気汚染も休みなるらし  
杖かざす魔女はわれより婿殿へああ四歳よっさいの児の小さき手が抜く  
覚めやらぬ咽をこくりと富士の水今日の始動のスイッチが入る  
目の前の駅が遠のく三本の足となれるにこの算合わぬ  
リハビリは正しく自然に歩くことこの単純が単純ならず

## 横田敏子

指定席

・福

八年目によやく相馬の海開き 一年生は震災後生まれ  
春に来て秋にまた来て入院し馴染みてきたる横浜の空  
帰り来て茶の間の椅子に座りたりふた月振りのわが指定席  
手振れば零れて小さきあさがおの種ひと粒のいのちを思う  
鉛筆を削ればほのかな木の香あり嗅げば昭和の教室浮かぶ  
雪道をリハビリ兼ねてポストまで約束の文ようやく送る  
吹雪く夜をいつしか眠りに落ちてゆく長き夜明けて来る春はある

## 吉永惟昭

影

・熊

影うてる出湯露天の涅槃像恐れ多くも跨ぎて浸る  
雨後の月濡れに来たのか影法師水捌けあえぬ駐車場まで  
語り継ぐ血のメーデーも遙かはるか友と隔つる牡丹落つ庭  
対岸は葉守の神を宿す樹々童に戻れとゆらく陽炎  
伸び目立つ皇帝ダリア天重し西より迫る雲は紫  
筆を擱き一息ついて目薬をさせば驟雨に踊る紫陽花  
ものなべて変りゆくさま参議院顕政讃歌詠み継ぎてゆく

## 朝井恭子

夏ばて

・森

夏ばてに臥しいる我に顔よせて「ばあば生きてる？」と幼児は問う  
裏山のうぐいすの声途絶えゆきいつしか秋の気配近づく  
落ちし蝉つまみ上げるに「ジー・ジー」と短く鳴きて飛び去り行きぬ  
古里の友より届きし白桃の甘き香独りの部屋を満たしぬ  
なす胡瓜色とりどりの夏野菜くりや彩り心たのしき  
蚊帳を吊りふたおやと寝し夏遠し母の齢もいつしか越えて  
母よりの形見のきものに風通す年に一度の御目見得のこと

## 磯田ひさ子

娘にも嫁にも

・森

ちちははを送りしのちを自らの節目となして走り来たりぬ  
嫁きたる家をわが家と呼ぶまでに失ひしもの花 鳩 春日  
蓄への乏しきゆゑに離婚すらできぬと泣きし友のありたり  
女性こそ経済力を持つべしと古き自説を娘にも嫁にも  
手元不如意ならばきれいに生きられず冬の晶つらしき星座を仰ぐ  
まつさらな明日にするため夜の更けをアルミの大鍋なべさしきし磨く  
釈尊の涅槃に入りしといふ姿おもひつつ羽毛のふとん引き寄す

## 市原志郎

クロッカス

・萬

足もとにクロッカス咲き始めたる我が家の庭にも春は来ていた  
雪降らぬ石畳道ことごとと妻押しくるる車椅子早し  
猪の我が年となりしに何回目かと改めて思う指折りながら  
わが横を音立てて風が過ぎ行けり「そうだ二百十日だ今日は」  
燕が今年雛を孵した軒の下今年はしばしそこ貸してやれ  
今日梅雨入りというニュースあり寝たまま聞けり雨の小さき音  
一錠を飲むこと夜半に歯をみがくことを残して今夜は終わる

市原やよひ

零余子

・萬

庭隅の芋の蔓よりこぼれ落つ零余子に足れり二人のこはん  
はんやりと信号の点滅見て居たり十年経しも馴染めぬ街の  
朝に飲む葉ひい・ふう・み・八つ教えて今日が始まる  
夫抱え診察室に入り行けば「仲良しですか」医師の声あり  
カラスの雛のがれて生れし子つばめの五羽が揃いて顔を見せたり  
踊り子草大犬ふぐり花咲けば残し置きたり庭の草取り  
行けずとも誘いの電話くれし友温かき声抱きて眠る

大浪 美雪

野胡桃

・森

青白き水底に揺るる燃料棒石に封ぜられしを解きたる人はや  
胡桃とは言えど棘とげ野胡桃の小さき実のなか核などなくて  
粉ふきし干柿のなか放射状にひそみておりぬ細長き種  
骨だけとなりたる傘の頼りなさ赤き花咲く生地を張るうか  
日本語ははずこへ行きしやカタカナ語マルシエなるは市場のことか  
窓辺より猫と雀を見る我の後ろの正面だあれもいない  
地をゆける蟻にも黒き影のあり朝の日のもとそを引きてゆく

奥田 清和

地獄曼茶羅

・大

とくとくの清水の法師あらしめばコンピュータに歌詠みますや  
いくさ終へ毛布二枚もて帰還せしわれを待ちあしたらちねの母  
産土は延喜式内伊居太宮千歳といへどまばたきのとき  
地球人大宇宙駆けせめぎあふ魍魎魍魎の地獄曼茶羅  
遠き祖の酒屋の徳利丹波焼いまに残れるわがたからもの  
家を売り借家にひそみしわが父のゆづりのさかづきしみじみ重し  
ノートルダムムのステンドグラスに浮かび出づ妻との観光夢のまたゆめ

奥田 陽子

海光る

・羊

おおいなる公孫樹の光の下をゆく幼なとわれと一瞬の時  
胎動のはげしきを言っていたりしが雪の信濃へ発ちてゆきたり  
もう笑うもう見つめくるみどり児のただに小さく生れきて三日  
まさおなる海のものなかに吸われゆく身と思うまで立ちついたり  
小魚の跳ねるがごとき輝きの海をみてゆく五月の光  
海みゆる処に住まん浜辺より帰りに来し子の第一声は  
海青く映されてあり首長逝くは戦死にも似て沖細の夏

小野 雅子

空

・羊

初詣での帰りの道でみかん買ふ知らない町の小さな八百屋  
水色が迎へに来てピンクと出てゆく雨の二人の中学生  
見上ぐれば藤咲き満ちて地には白く星のやうなる花韭のはな  
歩いても行きつけなかつた日の記憶 青空をゆく一つの機影  
仔パンダは二歳を祝はれ人間の児は虐待に命を落とす  
小分けして家事を行ふ技おぼえ今日は網戸の一枚を拭く  
拭き上げたガラス越しに見る歳晩のきのふより寒き夕焼けの空

菊岡 栄子

我が家へ

・漣

わが為に多忙の中を来てくれる息子の顔見れば心のほぐる  
睡眠中いく度も止まるわが息も無呼吸症候群のPパップ着ける  
視力萎えテレビは音に頼るのみその日のニュース切れ切れとなる  
正月に掃宅せんとぞ施設にて夫の迎えをひたすらに待つ  
息子の作るお節料理の香り立つ久しぶりなる我が家へ帰る  
うかららの揃いて祝う膳に着く息子の作りたる白味噌雑煮  
高校の同級生のノンちゃんが柏汁持ちて見舞ってくれる

菊地栄子 余情 湾

至らざる過去がつぎつぎ零れ出す綻びやすき胸の奥より  
おさまらぬ怒りのように降り来たる咳喘ぐ身をいたわらんとす  
モーター音震わせながら草刈りの作業をするは七人の使徒  
自らを励ますよき（失敗は成功のもと、成功のもと）  
うとうとと風邪に臥しいる夕つ方あな煩わし腹が空きくる  
まだ寒き西の疾風に乾しあげて畳む夕べは澄む心地する  
ジ・エンドののち奏でくるシンフォニー身に新たなる余情をひろく

木村文子 地震 羊

地震のあと黙したままの市街地を食糧抱え歩む母と子  
くちびるは水菓子欲する湧きいずる真水を欲する言葉ではなく  
夜が明けてどの店先にも人の列 三日ほどなら買わずに済むが  
信号の消えた町なか角ごとで一旦停止 不思議な静けさ  
太陽を確かめながら過こしおり夜に備えることの多くて  
一週間と聞かされ驚く停電は水をも奪うマンション暮らしの  
光なき初めての夜かきませた糠の発酵思つて眠る

草刈十郎 遠雷 世

蟬時雨己の天命知るごとく力の限り鳴き続けをり  
ひと雨のほしき猛暑に遠雷のひびけど一粒の雨もこぼさじ  
平和なる幸せ思ひ終日を野球見てゐるけふ原爆忌  
わが兄の軍服アルバム開きつつ昭和を語るけふ終戦日  
猛暑日の花鳥風月みな黙す老いたるわれも息絶えだえに  
わが歩く先へ先へと赤とんぼひと雨すぎし涼風の道  
大地へとこぼるるほどの銀河なり眠れぬ夜半のその美しさ

國井節子 茶釜の里 春

あなかしこ世界遺産に指定され仁徳天皇さみしからずや  
満満と水を湛ふる垂仁陵ボツンと小さき田道間守の塚  
万葉の歌垣の跡石櫛市のこれより先は山の辺の道  
山桃の朱実はじけて敦盛の首塚の辺にあかき雨ふる  
寒干しの茶釜の里の静けさや笹の葉ずれのやさしさやき  
ひっそりと誰も居ないお茶室で少し濃い目のお茶を点てたり  
茶の湯には欠かせぬ茶釜 茶杓の類一子相伝守り抜きたり

小泉泰清 令和元年 う

令和元年曾孫が芽生ゆと聞かされて急に染しも頬のゆるみぬ  
この錦秋われは米寿に孫に子が生るるなるらし心弾みぬ  
里山よりみさくる果ての太平洋銀線を引き空に輝く  
ダイヤ婚勞をねぎらひ小粒なるかがやき妻の胸に潜ます  
一步づつ緩く歩みてひこぼえの夕影揺らす田圃道行く  
猫ちやらし白粉花の連れ合ひ拘置所に沿ふ道辺に揺らぐ  
杉木立、竹の林もさみどりに春の里山膨らみて見ゆ

河野繁子 呼ぶ声 雁

山城のありたる頃のひと思うその山裾に住みて明け暮る  
秋は山冬は平地に降りてくるつぐみの群れの歩む里山  
終焉の地と住み慣れて初耳のじゅういち・じゅういち声の明るし  
鳴きやまぬ鳥を見上げて立ちつくす真昼間しんと人影のなし  
一日の花に白さをきわめたる神のたまもの大山蓮華  
絵手紙に描かれ届く大山蓮華一期一会のえにし結びて  
他の人はひょいと飛び越す塀の前とどまる長しわが一生は

小西美智子

新しき夏

・大

万葉講座ともに通いし三人<sup>みたり</sup>逝き平成最後の彼岸近づく  
 あお空に羽撃かんとすしろじろと平成なごりの富士の農鳥  
 訪いし家こぼたれ夏草生い茂る売地の看板ぼつんと立てり  
 住み居りし人の記憶もうすれゆく世代交代すすむこの町  
 ハチ公の逸話は哀し大戦に銅像までも供出されて  
 まなじりの蠅をはらわずアフリカの子は分けやると少しの水を  
 蟬の声ういういしきを聴き得たり七十路余りの新しき夏

小林能子

風の潤ひ

・羊

海を渡り来たれる蝶が翅展く『地中海』第六十七巻の表紙  
 手のひらのぬくもり保つ石ひとつ懐にしてまどろむばかり  
 花散りて残る緑のひと鉢に励まざる日々わがアタージオ  
 相馬焼きの重ねの縁に花びらをあづけて夕べ ひとりの宴  
 目を凝らし見つむる芝生にムクドリとおぼしき一羽の影が飛びたつ  
 カラス奴に袋奪はれてなるものか 杖つきて急ぐ塵集積所まで  
 「からす なせなくの」ふと口ずさむ夕べの風の潤ひのなか

近藤栄昭

尾瀬

・福

前橋で雨に出あえば雨ならん鳩待峠そしてその先  
 尾瀬行きを山に触れたく選びしに気重となりぬ心さらすが  
 山道に熊の領域しらす鈴入りますコンコン出ますカンカン  
 同室にお風呂ゆこうは伝わらず早口外国語小屋の受付  
 けが人に付き添う人が必要と二人吊りあく群馬県警  
 木道の角は陽を受けぬくむ春リウウキンカ咲く尾瀬の秋色  
 草もみじ時雨れる原に鹿の跡大きくひと筋しなう曲線

近藤芳仙

美ヶ原

信

水無月をこえしばかりの高原は緑にあふれて陽をかへしをり  
 前足をおりてはらばふ木曾馬は木柵のかけ腫にうつす  
 放牧の牛のむれよる塩くれ場ふたつの石は核かうこかず  
 ふるびたる尾崎喜八の詩碑のうた溶岩台地の冬にふれをり  
 夏雲が原のはたてを湧きのほり空をおしあぐ我も立たねば  
 青き空あふるる緑ふるはせて塔の鐘つくひびかすために  
 夕の陽の入りゆくひまのかがよひて耳朶にのこれる鼓動を覚ます

坂上直美

秋窓

・天

ようやくに涼しき風の吹き初めてヴェランダに出て山を見る朝  
 秋風よ歌なき日々を吹きはらえヴェランダに出て山を見る朝  
 秋天瑠璃老いゆくことの嬉しさよ刻一刻の呼吸深くする  
 広からぬマンションなれど遠く見る送り火の山文字あざやけし  
 明日の日のあるを疑うことなけれ秋夕暮れの紅のいろ  
 死後のこと死後に知るべし今はただ月の光を窓辺に浴びん  
 赤く輝る火の星雨の空にあり我らに何を伝えんとする

坂出裕子

春夏秋冬

・洛

おぼろ月おぼろにかすむふうはり春の気配の雲のあはひに  
 街灯が順にともるを窓の辺に子供やうに立つて見てゐる  
 覗いてる私のことを知つてると時をり鳥が窓に近づくと  
 いつまでもつづく夏かと思ひしが闇にきこゆる鈴虫のこゑ  
 人住まずなりたる家の蔦紅葉くれなるふかく夕べ照り映ゆ  
 とほき日に訪ひしあの街とつづくのあの建物がいま目の前に  
 あたたかく日が差しくればたちまちにこころ明るく軽くなりゆく

## 佐久間 晟

自選七首

・湾

やがて春行くこともなき山毛榉森に思いは続く木の芽草の芽  
何の花か空に向かいて咲きはじむそしてやがては独り散るのみ  
卒寿過ぎしわが人生の奥入りに光ともなれこの歌作り  
大正に生まれ昭和に泣き平成に己を取り戻し令和には逝くのか  
香を焚き南無阿弥陀仏とは何のこと見知らぬ世界を信せよと言うか  
ひっそりと今日降る雨は汚れたる空を清らに洗わん雨か  
古い二人朝を静かに目覚めては語り少なき今日がはじまる

## 佐久間 すゑ子

自選七首

・湾

冬の陽がかすかに庭に届いては南天の実のつぶつぶも賑やか  
もう迷子になってしまったらしい。街隅に九十三歳がひとり立っている  
さりげなく席を譲ってくれた人。「光源氏」をまた読み続けている  
体力の尽きたこの頃、休み休みの仕事のさまは悲しみに似る  
寄り道をして逢って行こうか。でもその人はもう居ない  
台所で蛭が水を吹いている。ああ生きてるのだ、もう食べられぬ  
台風が襲う地名を聞くたびに思いは浮かぶ友の数々

## 鈴木 結志

玉座の書法

・福

情感の発露におほゆ顔真卿書法一変顔法きすく  
欧陽詢自ら生みし「極則」の體銘泉の書凜として映ゆ  
ふくよかな線美鋭く王羲之の書は手本としあがめられきぬ  
わが心ゆさぶる変化躍動し褚遂良の書筆線さやか  
空海の書節度よく伝統の筆致の技をこころにきざむ  
嵯峨天皇宸翰「光定戒牒」の書風鋭敏見る目ひき込む  
奈良時代写経の中に類のなき聖武天皇の文字王位ゆるがじ

## 関根 榮子

春の満月

・埼

温暖化こまできたたり富士山頂に外来植物の根付きしニユース  
括られて畑に残されし白菜の霜光りつつ立春近し  
こどもまた空家となれり庭すみにハコネウツギの梅雨空に咲く  
会果てて三三五五に帰り行く「ほら見て見て」と春の満月  
暑き暑き地球脱出の未来図に月には氷、火星に水あるとう  
健康に比例するらし髪伸び爪の伸び方意識するあり  
年明けて何を始めんふと思う「年甲斐もない」の言葉のありて

## 関根 和美

サバンナ

・埼

両腕を動かせぬまま一本の杭とし横たう悔い持てる身を  
サバンナに麒麟が草食む音のよう六人部屋に咀嚼はすすむ  
CTの画像に覗く右手首ピノキオのようなネジが支える  
肝心なとき役立たぬ長男の嫁なるわれの為すべきは何  
わが夫の最後の授業を見届けてその日入院三日後に逝く  
昭和二年生まれの義父は平成とともに去りゆく大往生なり  
麦の穂の波おしよせる黄金の風景のなかふるさとをゆく

## 高尾 恭子

もう帰ろう

・大

文盲の少女が摘みしや海こえて赤いリボンのボンボンシヨコラ  
貧困の連鎖はるかに一粒のアーモンドチョコかみしめている  
ヒロヒトは遠くなりけり戦争を知らぬ子どもそのままに遊きたし  
ある日神が人間だったと宣えばオズの眼鏡を背空に放る  
一頭になった旦那ながいながい物語りせよ六甲おろし  
旅に出た「くだおれ太郎」が戻り来ぬローマ字表記の浪花のちまた  
堀川の土手の桜を仰ぎみる「もう帰ろう」と母の言うまで

## 高津砂千子

天上の花

・風

とろとろと眠りにおちてゆく姉か午後の陽ざしがベッドを移る  
 「少し気が入ってきたわ」化粧する姉うつくしき死の五日前  
 肩寄せるとともに号泣する人のぬくもり伝う姉の葬りに  
 ただひとりの姉みまかりし年の暮喪章の色の手帖あがなう  
 深夜まで働く姉をいさめれば「これが生き方」貫き通す  
 わが造りし味噌まっ先に味噌ってほしき姉はも天上の花  
 ふと姉の声を聞きたくなる真昼 外の面はましろ雪の降り積む

## 滝田靖子

八月

・新

喧騒の輪の中に席の見つからずひとり初夏の海を見てゐる  
 傷つけると知りつつ放つ言の葉の跳ね返りきつとわれを苛む  
 傷つけるものあらねば自らの愚かな心を苛めてしまふ  
 自らの稚拙な正義を振りかざし誰を傷つけ終はる八月  
 コンビニのレジの店員がにこやかに温めますかと言ふ 何を  
 真夜中をふと目覚めれば部屋うちには月の光の満ちて 泣かむか  
 身の内にぎつしりと死が降り積もる患者十人逝きし八月

## 竹下妙子

つれづれ

・霧

魔道のかたへに御座す道祖神おひとりなれど微笑み給ふ  
 散るきはの危ふさも見き夜ざくらの花の盛りの下くぐり来て  
 暮れなつむ草原の辺に佇みて草そよぐのみのひそけさにをり  
 椿の葉滯らせるのみに過ぎゆけり時雨のいろの寂しかりけり  
 冬水はひそけかりけりゆつたりと川の底ひを光りつつゆく  
 暮れてゆく陽の静かなるくれなゐを亡夫とも思ひ吾とも思ふ  
 霧島は端然とあり 地上の汚辱 人世のかなしみ

## 田土成彦

気動車

・宙

銀河鉄道風をともしなひいましてがたわれのそびらを過ぎたる気配  
 アーチ橋にさしかかるととき月光のシルエットとなる気動車二両  
 窓開けしときジョバンニも聞きたらむ鈴虫の音のまじる涼風  
 葉を落とし尽くした榎が偉丈夫のやうに銀河の帯に真向かふ  
 オールトの雲抜け出でし水塊のあらむ寒の水のみどを下る  
 熱湯に溶けゆく葛の粘性が伝はるスプーンを持つ指先に  
 目刺し二尾木綿半丁くづれ梅昼餉の贅をいただきます

## 田土才恵

いずみホール

・宙

天を突く思いを胸に今朝の空広がる藍を吸い込み歩く  
 欲びよあふれよ真青なる空と別れて楽屋入口に立つ  
 あふれくる思いを超えし緊張感みなぎりきたり足のさきまで  
 ゆらゆらと小さく揺るるイヤリング舞台衣装のわが耳朶にあり  
 銀ネズの下ドレスに歩み行く舞台中ほどにある立ち位置までを  
 指揮の手の動き眼に追いつ瞬を一体となる百人の声  
 ライト浴び舞台に歌う束の間を夢見て来たり酷暑も越えて

## 玉井綾子

香ばしき音

・羊

弾き終えし手指がそろって跳ね上がる 自然のオーレノラ・クンパルシータ  
 自分の手と隣の子ばかり見て弾けばタクトもピアノも置いてけぼりに  
 布団カバー開くファスナーの音高く生あたたかき夢揮発する  
 デニッシュを包む白紙香ばしき音吸えるだけ吸って透けゆく  
 やかましく混ぜる卵液出版社する前から会議の助走を始む  
 内示の頃 見慣れぬ着信番号に臍腑の奥で鳴るドラムロール  
 刺き去りしバナナの皮の黒ずみぬ 守るつもりが生かされている

虎谷 信子

ふたたび

・伴

新たな年号きまる「令和」とぞ。万葉集を ふたたび読まな  
 何とまあ、四つの世代を生きてこし。友よ語らう、青春かへれ  
 夾竹桃あかあ咲けば、端居して、若き日の夢 托してもみむ  
 大川の夜空いろいろ 祭り火花。師も観給ふや とこ世にありて  
 天神まつりに 関係ふかき近江屋は、師のふるさとよ間口の広し  
 祭り日は師の供をして にきにぎと、逕空会の 二次会たのし  
 天満宮にての夏期講座なる案内いたたく今にしつづく民俗勉強

福田 庸子

かもしかの道

・今

かもしかと見つめあふ山みづならの丸き実まろびしづまりゆけり  
 両側に迫りくる霧尾根道を淡くにじます水榭の木木  
 砂丘の裾をめぐりて真向へば島影太き佐渡迫りくる  
 会津より流れくる雲追ひゆけば雪をひろげる遠きやまなみ  
 背見せてパンを啄む鶴と冬をやすらぐひとときとせん  
 光線の強き春日を撥ねかへす力のままに立羽蝶飛ぶ  
 播但線軌む車輛に身を任せ青菜の闇をくぐりぬけたり

久我 田鶴子

茶 葉

・羊

みちしるべにみちびかれつつまよひつつ一日明日香のふところのなか  
 飛鳥川わたりしさきの石舞台男うこくは枯れ草を刈る  
 寒凌ぐ日々を電話に母の言ふ「生きてらんない」 まだ余裕ある  
 ゆふぐれに傾いてゆく言の葉よでたらめ尽くし華やいでるよ  
 息を吐く息を吸ふため息を吐く くれなる絞る椿をこ覧  
 べにふうきの茶葉のひらくを待ちながら産地对馬から大西巨人へ  
 ウンカが囁んだ茶葉の甘さを教へつつ蜜香紅茶こころにも効く

## 香川進の生きものの歌

14

田土 成彦

・死の勝利のごとくけぞる屍あり群れつつ鳥がついばみ  
 いたり  
 『インドの門』より

地中海の本社の入っている同じビルに、「火葬研」という名  
 札がかかっている部屋がある。仕事の内容は知らないが初めて  
 見たときにはとんでもない違和感を持った。日本では葬送の最  
 終として火葬が常識になっているが、諸外国ではそうでもない  
 らしい。この歌に出てくる鳥葬もその一つの形態であろうが、  
 私たちにはおどろおどろしい感じがする。

歌集の見出しにある「沈黙の塔」(パキスタン)はダフマと  
 呼ばれ、鳥葬専用の施設で開口部のある円筒状の塔であるとい  
 う。その上に置かれた死体は歌にあるように鳥がついばみ、つ  
 いには骨となってしまう。生き物の命を奪って作った肉体だか  
 ら用が済めばそれを生き物に返してやろうという思想なのだろ  
 う。ある面、焼いてしまうよりは合理的な処理かもしれないと  
 思ったりする。一九五九年、東南アジア・インド方面の長期出  
 張での歌と思われる。冷徹に感情を押し殺した観察がすごい。  
 並のバイタリティではとても持てない強靱さだ。「死の勝利」  
 という言葉は別の歌にも出てくるが、香川進独自の死への積極  
 的な向き合い方だと思う。「のけぞる」という一語のインパク  
 トの強さは何なんだろう。日本でももし、鳥葬があればカラス  
 などがその主役を担うのだろう。



## 午前三時

佐久間 晨

「地中海」発足して二年程経ったころ、木下産商時代の師は超多忙。会社の人に聞いた話では、エレベーターを待つ時間ももどかしく、四階くらいまでだったら、階段を駆け足で登り降りしたとか。そして夜は夜で取引先との打ち合せや接待など。一体いつ勉強なさるのですか、とお聞きしたところ、「わしは朝だ、朝の四時から六時までの二時間だ」ということ。先生が二時間ならば私は三時間、ということ。午前三時起きを直ぐに実行した。それから六十余年、今では完全に私の生活のパターンとして定着している。従って就寝は午後七時半、ニュースが終わり次第。五分で熟睡。それで一番困ることは、吟行会等と一緒に出掛けた時、午前三時と言えは皆さんが熟睡している時間、私は眼が覚めてしまう。それで、窓のカーテンを被りながら外を見て歌作りをして時間を潰していたのである。

早い頃、創刊十年も経った頃だったか、雑誌社から原稿依頼も来るようになった。嬉しかった。そうして何年か過ぎた頃、評論の依頼が来た。「歌壇に物申す」という題だった。早速師に教えを請うたところ、「アノナ（こでもアノナが来た）、わしは君を歌人にしようとは思っているが、評論家にしようとは思ってもいけない」ということ。解りましたと早速雑誌社に辞退の返事を書いた。その後も三度程評論の依頼が有ったが、すべてお断り。その内、評論はもとより、歌の依頼も来なくなり、それは今でも続いているが、別にどういふ思いもない。

ある日のこと、私も歌壇の集まりに出てみたいとお伺いしたところ、「あんな姿は君には見せたくない」という事。意味は解らなかつた。何年か過ぎて、師から、歌人クラブの総会に行つて、K氏に会つてお礼を言つてくれ、という。その日、師が口演する予定が急用で出来なくなり、急遽K氏に代わつて頂いたので、そのお礼をということであつた。

当日、総会は肅々と終わり、懇親会に入るや情況は一変し、ジャーナリストの席には売名の人ばかり。師の言われた「あんな姿は」とはこの事かとその時解つた。何と哀れな立ち振る舞いなのであるうか、歌人の哀れな一面をよくよく知つた時であつた。

## 今月の二人

### 母

#### くずはらりつ

母病みて隔離されたる幼少期母との思い出吾にはあらず  
屏風と商売人は直ぐ立たぬ言いたる母に抗いし日々

愚痴こぼす電話の吾に客ありと電話切りたる凜たる母は  
愚痴こぼす母の記憶は吾になし笑顔のどこに収めたりしか  
母病みて五ヶ月共に病室で虚ろなる日を埋めんと子は  
一つだけやり残したことがある三味線弾きが叶わなかったと  
十分に生きたと母は腎瘻の造設拒み命を仕舞う

「ありがとう、ありがとうね」と子や孫と握手を交わし母は逝きたる  
集落の人と行き交う幼な日に「踊れば花じゃ」乗せられし吾  
踊りこそ共に喜び合いしものやり残すまい古稀の手習い  
十分に生きましたよと子や孫に伝え逝きたし手土産として  
生ききるとコミットメントする吾を亡き両親が後押ししたる  
軽やかにたおやかに今七十路を歩み初めたる可能開きて

#### 母への誓い

母は、私の幼少期に腎結核を患い隔離入院を余儀なくされました。幼少期の母との思い出が皆無に等しい私は、埋まらない空洞のようなものを感じていました。

母が最後に入院をしたのが、私の定年の二ヶ月前でした。この機会に母との時間を取り戻したい、母の看病に専念したいと退職させていただきました。

それから五ヶ月、たっぷりと密度の濃い時間を過ごし、母は自らの意思で治療の選択をし、家族が見守る中、穏やかに八十四歳の生涯を閉じました。

母に寄り添った五ヶ月の日々、母の生き来し方、命への向き合い方等々、私にとっでかけがえのない時間となりました。時間の経過とともに満ちてくるものがありました。やり残していることはないかと自問してみると、次々に浮かんでき、食欲に挑戦しました。そして、ふと思いついたことがあったのです。幼い頃、大人たちの手拍子に乗せられて踊っていたことを。古稀を間近に新舞踊を習い始めました。自分も他の人達も楽しませることができると。

ありがとう！ お母さん！

## 今月の二人

### お背戸

山崎三千代

父祖の地の越後を訪いしは少女の頃暑き日差しを試練の旅路  
 茅葺きに目を細めいる父と二人涼風通るお背戸のたんけん  
 古井戸をのぞけば清く澄む水の赤い金魚はにわかには散れり  
 農機具と同居の厠に鍵もなくオロオロしては馬と目が合う  
 醤油のカビ除けつつ炊きし田舎料理少女のわれにも一人前に  
 寡黙なるはご先祖よりの性なりや父の兄弟野地蔵のよう  
 素直なる名の付け方や一、二、三と数字の入り父は三吉  
 御先祖の墓は畑にこんもりと稲の実りを見守るさまに  
 湧水に添えて置かれし茶わんの白さ村の人らのまごころを知りぬ  
 瀬の音に明日の天気を占うと代々継がれし知恵の尊き  
 雪の朝提灯下げて門辺まで添いくれしとう祖母よ逢いたかった  
 ほろ酔いの父が繰りだす昔話すかさず手を打ち「出ました」と母は  
 み社の幟にのこる父の文字ふるさと思ひ揺れるや祭りに

### われの思い

今は亡き父に連れられ越後に旅をしたのは少女の頃でした。汽車の駅から田舎の道をひたすら歩いてやっとなどり着いたのを覚えてます。昔の子供は辛抱強かった。泣き事を言ったら父が困ると思ったから。

平成十一年より三年間「短歌」の通信講座を受けた事を思い出し資料を探し出しました。なつかしい思いで読み返してみると「あなたは何処にいますか」とか「あなたの思いは何ですか」等の批評がありました。その頃は何かのこころざらさっぱり分からずになりましたが、今になりようやく理解出来るようになりました。

平成十五年より指導して下さっている佐久間晟先生は常々「われの思いを詠みなさい。われの思いならなんぼでも出てくるよ」とおっしゃいます。「先生、出てこないんですけど」と申し上げると「それは見逃しているだけ」と切り返されました。

佐久間先生はいくつもサークルを持っておられ、そのうちのひとつ「将監短歌会」に私は所属いたしております。やさしく、時には厳しいこともおっしゃいますが、これからは御指導を仰ぎたいと思っております。

◆今月の二人・くずはらりつ品評◆  
「踊れば花じゃ」と乗せられ

くずはらさんは、鹿児島市在住。母との思い出から始まり、古稀を迎えた現在のご自身の思いを詠っている。

・ 母病みて隔離されたる幼少期母との思い出吾にはあらず  
くずはらさんが幼かった頃、結核のために隔離されていた母。それゆえ、幼少期の母との思い出がないのだという。三句目は、字余りになっても「幼少期の」と「の」を入れた方がいい。  
・ 愚痴こぼす母の記憶は吾になし笑顔のどこに収めたりしか  
記憶の中の母は、いつも笑顔だったのだろう。愚痴をこぼすところなど見たことがないという。時には、こぼしたいこともあったろうに「笑顔のどこに収めたりしか」という下の句に、母への敬意が籠っている。

・ 「ありがとう、ありがとうね」と子や孫と握手を交わし母は逝きたる

治療の仕方を見ずから選択し、八十四歳の生涯を閉じたという母上。その見事な最期を看取った作者であった。

・ 集落の人と行き交う幼な日に「踊れば花じゃ」と乗せられし吾

亡くなった母から、転じて「吾」に。やり残していることはと考えたときに浮かんできたのは、幼い頃に集落の人たちに乗せられて踊ったことだったという。「人と行き交う」は、歌の内容からすると「人とまじらう」「人の輪のなか」くらいか。

・ 軽やかにたおやかに今七十路を歩み初めたる可能開きて

四句目は「たり」と切り、結句は具体的にされた方がいいだろう。古稀からの出発。まだまだこれからという意気込みがいい。

◆今月の二人・山崎三千代作品評◆  
すかさず手を打ち「出ました」と

評者・久我田鶴子

山崎さんは、仙台市在住。父祖の地は越後で、少女の頃に訪れたことがあるという。その時のことが詠われている。

・ 茅葺きに目を細めいる父と二人涼風通るお背戸のたんけん  
茅葺きの家を懐かしげに見ている父と並ぶ、少女だった作者。やがて、少女は「お背戸のたんけん」をはじめ。「たんけん」とひらがな書きにしたところに、幼かった日の思いが重なる。  
・ 農機具と同居の厩に鏝もなくオロオロしては馬と目が合う  
茅葺きの家の様子が具体的に、よくわかる。その時の、困った少女の様子や思いも伝わってきて、つい笑ってしまう。  
・ 寡黙なるはご先祖よりの性なりや父の兄弟野地蔵のよう  
父も、その兄弟も寡黙なのは、先祖代々の性なのかと思いを巡らしている。寡黙な様子を「野地蔵」と喩えたのも、父祖の地である越後に相応しいような……。

・ 湧水に添えて置かれし茶わんの白さ村の人らのまごころを知りぬ

湧水を飲む人のために置かれている茶わん。その白さは、使う人のために手入れされていることの証だ。村人の心の有り様に、はっとする作者である。三句目「茶わんの白さ」は字余りだが、「白さ」までいうところに意味がある。

・ ほろ酔いの父が繰りだす昔話すかさず手を打ち「出ました」と母は

その時の様子が目に見えるようだ。「繰りだす」「すかさず」、このぼんぼんとした言葉の運び。字余りも気にならず、感情表現がなくても、それぞれの思いがはっきり感じ取れる。

多感な女学生時代は、大戦の最中であり、学徒動員に出動し、軍需工場で零戦の部品づくりで励んでおりました。文字通り軍国の花、文学に親しんでいる余裕などはありません。

敗戦となり、学校に戻ることが出来たものの卒業までわずかの半年あまり、しかしその間、良き教師に恵まれ、源氏、平家、伊勢、万葉集、など、いずれもわずかずつですが熱心な指導を受け、「名文の箇所は暗唱するように」と強く求められた事を覚えております。

短かった学校生活をこのまま終わらせてしまう事が残念で進学いたしました。

戦も終わり、世の中が少しずつ平和を取り戻し、読書の時間も出来るようになり、私は学生時代、一般的によく読まれていた谷崎潤一郎、夏目漱石、島崎藤村、等々、詩歌に関しては、藤村、啄木、晶子、牧水、光太郎等、常に一冊は鞆の中に忍ばせており、よく通学電車の中で読みふけたものです。しかし、自分が作歌を試みようという事には考えが及びませんでした。卒業後、市内の小学校に教師として赴任いたしました。

高学年になり、初めて教材に和歌が出てまいりました。源平の合戦に破れ一ノ谷を

落ち延びてゆく平敦盛が藤原俊成の館を訪ね、一首の歌を千載集へ残してくれるように託したというお話です。

ゆきくれて木の下かけを宿とせば花や  
今宵の主ならまし

この教材が子供たちと私の和歌について初めての勉強の繋がりでした。

三十五年の教師生活が終わり、さて、こ



を率えてやらさね

私の作歌への関心がここにきてやっと始まりました。初めは「NHK短歌講座」に入門いたしました。二年間ほど御指導を受けました。退会。そうしているうちにある時、久しくお目にかからなかった友人に出会い、短歌の話となり、地中海「宙」の会へとお誘いを受けました。

地中海という大きな短歌結社に私が、としばらくの間は躊躇しましたが、心を決し参加させて頂きました。

指導者でおられる田土成彦様ご夫妻の、穏やかに一人一人の作品に対して作者の感覚を大切にする確かな批評御指導をして下さるお人柄を尊敬し、また会員の皆様が指導者を中心に熱心に意見を交換し、楽しく和やかに過ごされている雰囲気を引き込まれ、入会をお願い致しました。

晶子の歌晶子の恋にあこがれて六十路となりて歌詠みはじめ

楽しい歌会に加えて頂いて、あっという間にもう十五年以上の月日がたちました。振り返り自分の作品を読み返す事によって、自分の歩いて来た路が今更の様に偲ばれ、作歌を続けていくという事によって残る人生を有意義に、また豊かに過ごしてゆける事と信じております。

の自由の時間を如何に過ごすか、まずは旅行に、読書に、趣味に、あらゆる事に挑戦しました。ある時、次男の居住する筑波市を訪ね、彼方に聳える筑波山の神社へお参りをしました。その境内に何基かの万葉歌碑がありました。この山で古の若き男女が集い恋の歌垣を楽しんだ事でしよう。筑波嶺の嶺に霞居過ぎてに息づく君